

令和7年度長崎県公立学校  
教員採用選考第1次試験問題

教科・科目

高校 国語

受験番号

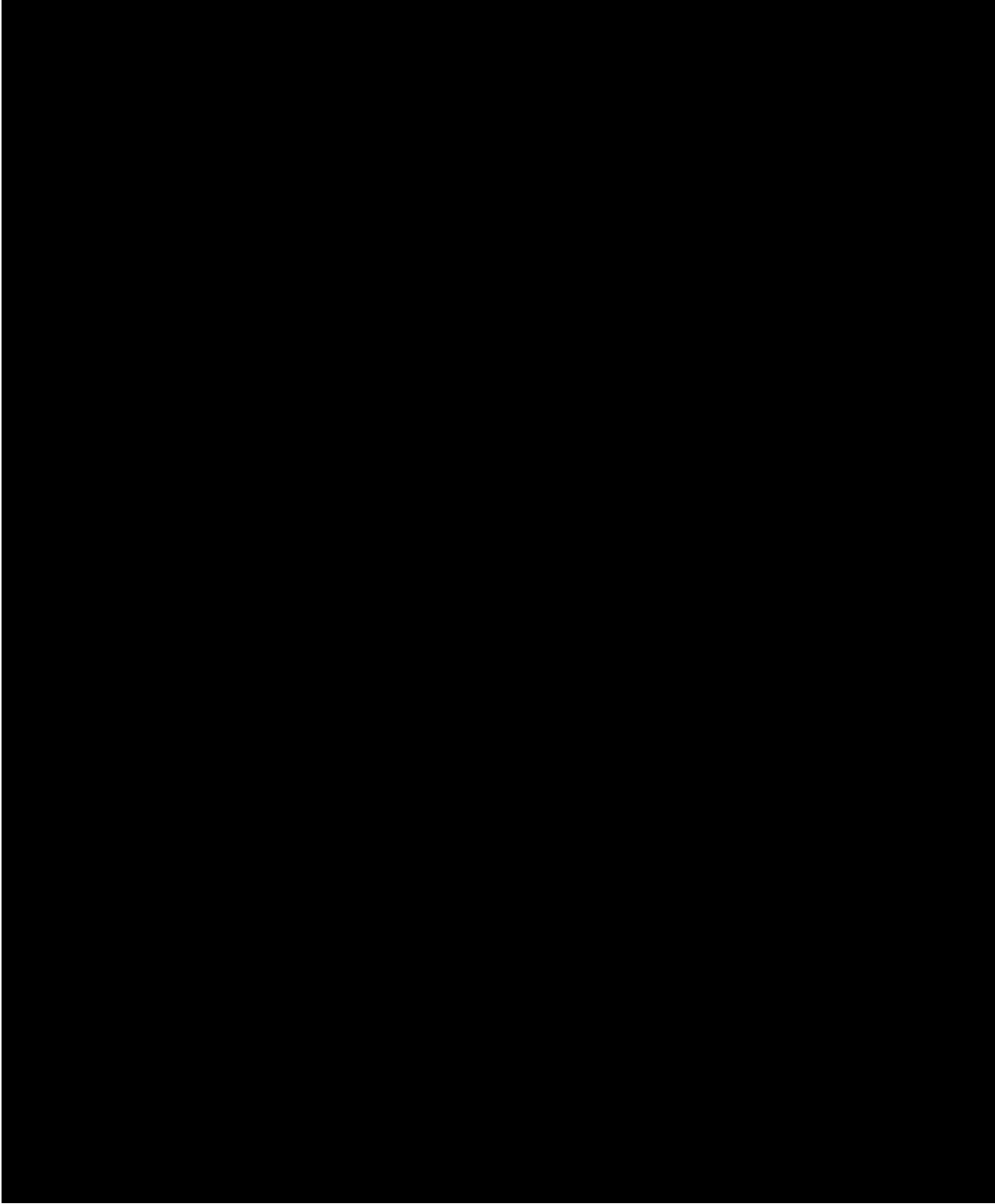
氏名

実施日 令和6年6月16日（日）

国語

- ※解答はすべて解答用紙の該当欄に記入すること。
- ※字数制限のある問題では、句読点やかっこも字数に含む。

一 次の文章は大岡信『詩・ことば・人間』の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。



※ ノヴァーリスの言葉にもとづいていえば……ノヴァーリスはドイツのロマン主義の詩人。本文の前でノヴァーリスの言葉について述べた部分がある。

問一 波線部 **a** ～ **c** のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 **A** ～ **C** に入る語の組合わせとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- |   |              |              |              |
|---|--------------|--------------|--------------|
| ア | <b>A</b> 個人的 | <b>B</b> 知識的 | <b>C</b> 客観的 |
| イ | <b>A</b> 偏見的 | <b>B</b> 体験的 | <b>C</b> 拒絶的 |
| ウ | <b>A</b> 懐疑的 | <b>B</b> 具体的 | <b>C</b> 攻撃的 |
| エ | <b>A</b> 独善的 | <b>B</b> 相対的 | <b>C</b> 親和的 |
| オ | <b>A</b> 差別的 | <b>B</b> 平均的 | <b>C</b> 閉鎖的 |

問三 空欄 **I** ～ **III** に入る接続詞もしくは副詞の組合わせとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- |   |               |                |               |
|---|---------------|----------------|---------------|
| ア | <b>I</b> かえって | <b>II</b> もちろん | <b>III</b> ただ |
| イ | <b>I</b> しかも  | <b>II</b> そして  | <b>III</b> やや |
| ウ | <b>I</b> かえって | <b>II</b> けれども | <b>III</b> さて |
| エ | <b>I</b> しかも  | <b>II</b> もちろん | <b>III</b> ただ |
| オ | <b>I</b> かえって | <b>II</b> けれども | <b>III</b> やや |

問四 次を示す文を補うのに最も適当な箇所はどこか。〔1〕～〔4〕の中から一つ選び、記号で答えよ。

そこから生じる悲しみや憤りを含めて、そういう気がする。

問五 傍線部①とあるが、「開かずの扉」が開くことを比喩的に表現した語句を本文中から十字程度で一つ抜き出して答えよ。

問六 空欄 i に入る語として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 存在しない
- イ 少ない
- ウ 開いている
- エ 多い
- オ 開かない

問七 傍線部②とあるが、どういう思いか。本文の内容を踏まえて六十字以内で説明せよ。

問八 本文の主旨として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 人の心と心がふれ合うことの本質的意味と、そこに関わる言葉の持つ力
- イ 思想や感情を呼びおこす他者の力と、他者に対する伝達や通信の重要性
- ウ 言葉の通路に光がさしこむ重要さと、コミュニケーション理論応用の是非
- エ コミュニケーションにおいて誤解が生じる原因と、それを回避する方策
- オ 物神崇拜的な言葉への接近と、その対極にある本当の言葉が持つ力の相克



次の文章は芥川竜之介『保吉の手帳から』の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。

5

10

15

20

25

30

35

問一 波線部 **a** と **c** のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書け。

問二 傍線部①とあるが、この言葉の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 取り返しがつかない失態
- イ 世間を憚る恥ずかしいこと
- ウ 思いがけないできごと
- エ あつてはならない不始末
- オ ある程度想定された事件

問三 傍線部②とあるが、それはなぜか。六十字以内で具体的に説明せよ。

問四 空欄 **I** に入る言葉として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 深刻に      イ 冷淡に      ウ 性急に      エ 快活に      オ 無骨に

問五 傍線部③とあるが、ここで保吉は大浦の行動についてどのように考えているか。保吉が普段、大浦に対して感じている人物像を踏まえた上で、六十字以内で説明せよ。

問六 傍線部④とあるが、その理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 教官である保吉に、本当の自分の考えはどうせ分かるはずがないと思うあきらめにも似た気持ちがあったから。
- イ 教官である保吉に、無鉄砲に行動した自分の思慮のなさが露呈してしまい狼狽する気持ちがあったから。
- ウ 教官である保吉に、たとえ泥棒逮捕に失敗したとしても、批判されるいわれはないと反発する気持ちがあったから。
- エ 教官である保吉に、とつさの折に賞与のことが頭を掠めた心中を見透かされたという気持ちがあったから。
- オ 教官である保吉に、自分が決して打算で行動をしたのではないことが知られているという気持ちがあったから。

問七 傍線部⑤とあるが、これは具体的に何を指しているのか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 誰も自分の勇気を認めてくれないという現実の陰に、それでも礼儀正しく振舞う大浦の健気さが潜んでいたこと。
- イ 泥棒を捕まえ損ねた大浦の言い訳の裏に、実は損得によらない本当の彼の気持ちが潜んでいたということ。
- ウ 格闘の末、泥棒に逃げられてしまったけれども、本当は掴まえることができたはずだという自信があったこと。
- エ 泥棒と格闘するという選択には、賞与の問題とは切り離せない大浦の生活上の事情が隠れていたということ。
- オ 自分の隠れたよこしまな気持ちを、教官である保吉に見抜かれてしまったという羞恥心があったこと。

問八 本文の内容や表現について説明したものとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 4行目の「夜警中の守衛は単身彼等を逮捕しようとした」「烈しい格闘の末」という描写は、夜警中であった大浦の、盗人逮捕のための行動の必死さや勇気を象徴的に表現している。
- イ 8行目の「武官はパンを頬張ったなり、苦しそくに笑っていた」という描写は、守衛に同情しつつも、武官にしてみれば意味のない行動であったことを比喩的に表現している。
- ウ 38行目の「その癡変に浮かなさそうだった」という描写は、直前の保吉の発言が自分に対して向けられた疑惑であることに戸惑う大浦の様子を情緒的に表現している。
- エ 43行目の「思わず口もとに動いた微笑を悟られないように噛み殺した」という描写は、保吉が大浦の行動を懐疑的に見ており、本心は自己保身にあるだろうことを婉曲的に表現している。
- オ 48行目の「あの一点のマツチの火は保吉の為にばかり擦られたのではない」という描写は、大浦が保吉に日頃から他の教官と保吉をどう区別しているのかを暗示的に表現している。

三 次の文章は『榮花物語』の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。

あさましういみじう、**A**えざらぬ人々を置いて別れたまふ人多かる年の有様、いはん方なく心憂しや。誰もよそよそなればこそおろかにもあれ、おのおの御家には、これに似たることなしとのみ思しまどふぞ、げにいみじうあはれに見えたまひける。かくすがくす世語にもしつべき年の有様にこそ、情けなう心憂けれ。

かくて※<sub>1</sub>四条の大納言殿は、※<sub>2</sub>内の大殿の上の御事の後は、よろづ倦<sup>う</sup>じはてたまひて、つくづくと御**B**おこな<sup>ひ</sup>びにて過ぐさせたまふ。法師と同じさまなる御有様なれど、これ思へばあいなきことなり、一日にても出家の功德世に勝れめでたかんなるものを、今しほしあらば、※<sub>3</sub>御匣殿の御事など出で来て、いと見捨てがたく、①わりなき御<sup>ほだし</sup>糾にこそおはせめ、さらば、このほどこそいとよきほどなれと思しとりて、②人知れずさるべき文ども見したため、※<sub>4</sub>御庄の司ども召して、あるべき事どものたまはせなどして、なほ今年と思すに、※<sub>5</sub>女御の、なほ人知れずあはれに心細く思されて、人の心はいみじういふかひなきものにこそありけれ、などておぼゆべからんと、いとわれながらも口惜しう思さるべし。何ことかはあると思しまはしつゝ、人知れず御心ひとつを思しまどはすも、いみじうあはれなり。この御本意ありといふことは、女御殿も知らせたまへれど、③いつといふことは知らせたまはず。

かかるほどに、※<sub>6</sub>椎を人の持てまゐりたれば、女御殿の御方へ奉らせたまひける。御<sup>はこ</sup>篋の蓋<sup>ふた</sup>を返したてまつらせたまふとて、女御殿、

④ありながら別れむよりはなかなかなくなりたるこの身どもがなと聞えたまひければ、大納言殿の御返し、

⑤奥山の椎がもとをし尋ね来はとまるこの身を知らざらめやは女御殿、いとあはれと思さる。

かくて大納言殿は、さぶらふ人々など**1**の、ひとくに頼みきこえたるをぞ、いとあまた見捨てがたく思さるるにつけても、あはれにのみ思されて、まだきにかくいふことを知らせじと思しけん、のたまふやうは、「※<sub>7</sub>長谷に堂建てんと思ふに、北に当りたればいと恐ろし**1**ければ、かの寺に年の内に行きて、四十五日そこにて過ぐして、来年の二月ばかりなん京に出づべき」などいふことをのたまはせつゝ、よろづにあべいことを思し捉て**1**ければ、※<sub>8</sub>弁の君よりはじめたてまつりて、たださのみ思したり。

- ※1 四条の大納言殿……藤原公任。
- ※2 内の大殿の上の御事…藤原教通の妻であつた公任の娘の死。
- ※3 御匣殿の御事……公任の孫生子の入内。
- ※4 御庄の司……荘園の管理人。
- ※5 女御……公任の姉妹醍子。花山天皇の女御。
- ※6 椎……椎の実。
- ※7 長谷……京都の地名。解脱寺があつた。
- ※8 弁の君……公任の息子定頼。

問一 点線部 **A・B** の意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

**A** えさらぬ人々

ア どうにもひどい人々

イ どうこう言う人々

ウ どうでもいい人々

エ どうにもならない人々

**B** おこなひ

ア 自宅での謹慎

イ 政治上の執り行い

ウ 仏前でのお勤め

エ 風流なふるまい

問二 本文中の **I** の文法的説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 格助詞で主格を示す。

イ 格助詞で同格を示す。

ウ 格助詞で連体修飾語をつくる。

エ 格助詞で体言の代わりに用いられる。

オ 接続助詞で逆接のはたらきをする。

問三 本文中の **Ⅱ** けれ・**Ⅲ** けれと文法的に同じものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 咲かざりし花も咲けれぞ

イ さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。

ウ 愛敬ありて言葉多からぬこそ、飽かず向かはまほしけれ。

エ 万の事も、始め終りこそをかしけれ。

オ 冬枯の気色こそ秋にはをさをさおとるましけれ。

問四 傍線部①とあるが、「公任」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 内の大殿の上が亡くなったので、御匣殿は家族間の愛情に悩み、入内することを拒むのではないかと心配する気持ち。

イ 御匣殿が入内することにでもなれば、今以上に俗世に執着を抱いてしまい、出家の決心もつかなくなるだろうという気持ち。

ウ 御匣殿が入内することにでもなれば、出家の決心もつかなくなるので、入内しないことを無理にでも願う気持ち。

エ 御匣殿が入内することにでもなれば、内の大殿の上との母子の結びつきが深くなるので、どうしようもないだろうという気持ち。

オ 娘である内の大殿の上が亡くなり、さらに孫の御匣殿が入内すれば、自分一人だけになってしまっているので、もの悲しいという気持ち。

問五 傍線部②の解釈として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 出家を決意して、内々に領地の地券などの始末をつけて

イ 内密に御庄の司を呼び寄せ、自分が出家する意思を文書に書いて

ウ 秘密裏に、御匣殿にあてて自分の出家の意思を手紙に書いて

エ 御匣殿だけに、自分が出家に迷っていると言づてを頼み

オ 御匣殿とのゆかりがなくなること悲しむ手紙を書いて

問六 傍線部③を、主語および具体的な内容を補って現代語訳せよ。

問七 傍線部④の和歌を現代語訳せよ。

問八 傍線部⑤の和歌に用いられている掛詞を、次の例にならって答えよ。

(例) 「松」に「待つ」を掛けている。

- 【四】 次の文章は『論衡』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。（ただし設問の都合上、本文の一部を改変したり、送り点や送り仮名を省略したりしている。）

夫<sup>レ</sup>賢君<sup>ハ</sup>能<sup>ク</sup>治<sup>ムルモ</sup>當<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>民<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>化<sup>スル</sup>當<sup>ニ</sup>乱<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>世<sup>ニ</sup>。  
 良<sup>ニ</sup>医<sup>、</sup>能<sup>ク</sup>行<sup>ヒ</sup>其<sup>、</sup>針<sup>ヲ</sup>藥<sup>ヲ</sup>使<sup>ムル</sup>方<sup>術</sup>驗<sup>ア</sup>者<sup>ハ</sup>、遇<sup>ヒ</sup>未<sup>ダ</sup>死<sup>セ</sup>之<sup>ヲ</sup>人<sup>ニ</sup>得<sup>レバ</sup>未<sup>ダ</sup>死<sup>セ</sup>之<sup>ヲ</sup>病<sup>ニ</sup>也。如<sup>ル</sup>命<sup>ニ</sup>窮<sup>アリ</sup>病<sup>ニ</sup>困<sup>ス</sup>、則<sup>チ</sup>雖<sup>ニ</sup>扁<sup>鵲</sup>、  
 無<sup>ニ</sup>如<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>何<sup>ニ</sup>。夫<sup>レ</sup>命<sup>ニ</sup>窮<sup>アリ</sup>病<sup>ニ</sup>困<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>カ</sup>治<sup>ム</sup>猶<sup>ホ</sup>夫<sup>、</sup>乱<sup>ニ</sup>民<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>カ</sup>安<sup>ス</sup>也。藥<sup>ノ</sup>氣<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>愈<sup>ヤス</sup>病<sup>ヲ</sup>猶<sup>ホ</sup>教<sup>ニ</sup>導<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>安<sup>スルガ</sup>民<sup>ヲ</sup>也。  
 皆<sup>ニ</sup>有<sup>リテ</sup>命<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>カ</sup>令<sup>ス</sup>勉<sup>ム</sup>力<sup>也</sup>也。公<sup>ニ</sup>伯<sup>ニ</sup>寮<sup>ニ</sup>愬<sup>ニ</sup>子<sup>ニ</sup>路<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>季<sup>ニ</sup>孫<sup>ニ</sup>。子<sup>ニ</sup>服<sup>ニ</sup>景<sup>ニ</sup>伯<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>告<sup>グ</sup>孔<sup>ニ</sup>子<sup>ニ</sup>。孔<sup>ニ</sup>子<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、道<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>將<sup>ル</sup>行<sup>也</sup>也與<sup>、</sup>命<sup>也</sup>也。道<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>將<sup>ル</sup>廢<sup>也</sup>也與<sup>、</sup>命<sup>也</sup>也。  
 由<sup>レ</sup>此<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>、教<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>行<sup>ル</sup>廢<sup>、</sup>國<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>安<sup>ハ</sup>危<sup>ハ</sup>皆<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>命<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>、非<sup>ズ</sup>人<sup>ノ</sup>力<sup>也</sup>也。

※1 方術……医術。

※2 驗……効きめ。

※3 扁鵲……伝説上の名医の名。

※4 藥氣……藥の治療力。

※5 命時……天命により定まっている時期。

※6 公伯寮愬く將廢也與、命也……『論語』憲問篇の中の話。公伯寮・子路は、ともに孔子の門人。季孫は、孔子の祖国である魯の権勢家で、子路の主人。子服景伯は、魯の大夫。

※7 與……ここでは置き字として訓読しない。

問一 二重傍線部 a・b の読みを、送り仮名も含めてひらがなで答えよ。（現代仮名遣いでもよい。）

問二 傍線部①を現代語訳せよ。

問三 **皆**が指す内容の組合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 賢君・良医
- イ 扁鵲・孔子
- ウ 未死之人・未死之病
- エ 藥氣之愈病・教導之安民
- オ 公伯寮・子路

問四 傍線部②は「勉力せしむべからざるなり」と訓読する。これを参考にして**返り点**を施せ。(送り仮名は不要。)

問五 傍線部③を書き下し文に改めよ。

問六 点線部 A のように筆者が言うのはなぜか。医師の場合と比較しながら六十字以内で説明せよ。

問七 本文の内容として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 寿命が尽きかけ、重篤な状態の患者は、扁鵲のような名医こそ救うことができる。
- イ 公伯寮は季孫のことを子路に讒言した。
- ウ 孔子は、正しい道が行われるか否かは全く天命次第だと述べた。
- エ 病気の治療と政治とはまったくかけ離れたことで、両者には関係がない。
- オ 優れた医師は政治の場でも優れた君主となり得る。